

言語聴覚士教育における言語学と音声学[※]氏 平 明^{※※}

言語学と音声学は言語聴覚士養成教育において必須の基礎専門科目とされている。言語聴覚士制度から期待されていることは、音声言語の記述と分析に不可欠な知識と技術の教授である。言語聴覚士養成教育からも同様な期待がある。しかしその担い手である言語学・音声学の教授担当者の技量と質は均一だと言い難い。また国家試験の出題項目には新しい言語学・音声学で不可欠な用語や概念が欠落している。言語学・音声学は学問と臨床が乖離しているというセラピーの臨床からの批判もある。それらを補うことも視野において、言語学・音声学から言語聴覚士への七つの提言を掲げた。しかし肝心の言語聴覚士を目指す人たちや言語聴覚士の言語学と音声学に対するニーズが高くなるには、日本の言語障害の研究と言語学・音声学の研究が相互に大きな影響を与え合うようになることが不可欠である。

キーワード：言語学, 音声学, 言語聴覚士, 言語聴覚士養成

1. はじめに

著者が言語学・音声学の研究と教育に携わりながら言語聴覚士養成にも関わってきた経験に基づき、現在の言語聴覚士養成教育への言語学・音声学の関与の現状を分析して、言語学・音声学が言語聴覚士養成教育とセラピーへどのように発展・展開する可能性を秘めているか、またその限界は何かを探究する。

言語聴覚士養成教育において言語学、音声学が基礎専門科目に組み込まれ、国家試験でかなり多くの問題が出題されている。この国家試験の関門を経て言語聴覚士（以下STで表す）が誕生する。そしてそのSTが携わる仕事は、医療関係か教育関係であり、前者が病院等の医療施設でのセラピーで、後者が療育施設や小中学校のことばときこえの教室（言語通級指導教室）の相談ならびに指導業務である。

医療関係の担当者には、概ね指導的な立場のSTと修行中の立場のSTがいる。前者の多くは言語聴覚士制度確立以前の言語障害学、心理学、

教育学、医学・看護学等いずれかの教育を受け、セラピーの経験を蓄積して初期の国家試験を経たSTである。言語学や音声学の専門的な教育を受けていないか、受けていても古いタイプの言語学・音声学が多くを占めると思われる。古いタイプとは1960年代以前、Chomsky & Halleの出現以前、音韻論で言うなら生成音韻論以前、の知見に基づいた言語学・音声学としておく。後者は言語聴覚士制度確立後の専門教育と国家試験を受けたSTである。もちろん言語聴覚士制度が確立して10年近くなるので、後者のみで担当者を構成している機関または後者の単数のSTを置いている機関もある。

一方、教育関係の担当者は、医療機関に準じている療育施設を除けば、独学で国家試験を合格するか、養成機関と国家試験を経た人もいるが、言語学・音声学の教育を全く受けていない人が多数を占める。

STとことばときこえの教室の教諭の言語学・音声学の再教育の機会は、自主的な勉強会、研修会や講演への参加、または独学となる。

※ Linguistics and Phonetics in Schooling for Speech Therapists

※※ 豊橋技術科学大学

2. 言語聴覚士制度が言語学・音声学に期待するもの

STの国家試験の出題項目（2008年度改訂版）を(1)にあげる。

(1) 国家試験の出題項目

- a. 言語学：言語学の基礎（言語の基本的な諸性質，言語の諸単位），音韻論（音素と音韻特徴，音節とその構造），文法論（形態素，単語と形態論，語順・文の構造とシンタックス），言語学とその他の分野（語彙と意味論，語用論と社会言語学，文字論，対照言語学と類型論，言語心理学），言語学的に見た日本語（日本語の音素・モーラ・アクセント，日本語の文法上の特徴，日本語のその他の特徴）
- b. 音声学：音声学とは（学術分野としての音声学，音の構造，音声学と音韻論），発声発語器官と構音（構音の観察，構音動態の測定），音声記号（IPA），分節音（音韻プロセス（同化など），音素配列論，調音結合），超分節的要素（ピッチアクセント，ストレスアクセント，イントネーション，リズム），日本語音声学（分節的特徴，超分節的特徴，撥音・促音の特徴，母音の無声化）

これらの項目から言語聴覚士制度が望むと思われるものは広範囲な知識で，これらは言語と音声を書述・分析するには不可欠な知識と考え方だと言える。(1a)の言語学では音韻論から語用論まで，いわゆる小言語学の範囲に加えて社会言語学と心理言語学と日本語学（国語学や国語教育学ではない）が加わる。言語学の基礎から応用までを日本語に即して身につける。(1b)の音声学では調音音声学の分節的特徴と超分節的特徴ならびに日本語音声学の諸相を対象として，音声学的なものと音韻論的なものを表裏で把握する。

一方，(1a)と(1b)で問題点としてはつぎの五点が挙げられる。第一に抽象的なものと具体的なものが混在している。第二に体系が見えない。第三に音声学と言語学で重複するところがある。第四

に古典的な（少し古びた）概念や用語が散見する。第五に発話や知覚の背景につながる言語学・音声学の概念や用語が乏しい。

問題点の中で特に気にかかるところは，第五の発話や知覚の背景につながる概念や用語が乏しい点である。「言語学の基礎」，とか「音声学とは」，という抽象的な項目に含まれてしまうのかもしれないが，例えば，有標性（有標と無標）が項目にあがっていない。これは言語の普遍性と個別性，正常と逸脱に通じる基本的な言語学の概念である。ここから言語学を語り始めることも可能である¹⁷⁾。また音韻論の領域で重要項目の欠落に触れると，音韻素性がある。音の最小単位を単音（phone）と捉えるか，分節素または分節音（segment）と捉えるか，音素（phoneme）と捉えるかで，記述や分析の背景が異なってくる。単音や音素では音声の線状の一元的な側面しか捉えられないが，分節素であれば調音（構音）に明示的に結びつく素性（feature）のマトリックスで多元的な音声の最小単位を見ることができる。古典的な音素という単位も，心理的実在性で裏付けられている有用な音韻単位だが，音韻素性も同様にスピーチエラー（言い間違い：錯誤）の例からその実在性が立証されている¹⁷⁾。素性という概念はローマンやコブソンの弁別の特徴として古くから用いられている⁵⁾。その素性による分析が主流となったのは，Chomsky & Halle (1968)のSPE¹⁾に始まる生成音韻論からである。そこから自然音韻論，不完全指定理論，素性階層理論，最適性理論に至るまで，音の最小単位は分節素で捉え，音韻素性を用いて様々な音声現象が分析されている。西欧における主な機能性構音障害の記述分析においても1970年代以降同様である²⁴⁾。心理言語学の文献等も1990年前後から音素から分節素という表現に変わってきているので⁴⁾，この音韻素性を理解していないと西欧の構音障害や非流暢性の言語学的な分析に関する論文や本が読めないことになる。統語論ではGBやミニマリストプログラムも同様であろう。以下，各領域の細かい指摘は省略するが，これらの問題点を補う配慮は，言語学・音声学を担当する教授者に委ねられている。

つぎにこの項目を教授することに与えられている時間（コマ数）と教授者について現状の一端を

紹介する。

3. 言語学・音声学の教授に使える時間(コマ数: 1コマ=1.5時間)

専門学校、大学によって言語学、音声学のコマ数(単位)が異なっている。概ね(2)に示す二種のコマ数かそれに近い設定である。

(2) 言語学・音声学のコマ数

- a. 言語学と音声学が各15コマ(試験1コマが含まれるか、含まれないか)
- b. 言語学と音声学が各30コマ(試験1コマが含まれるか、含まれないか)

言語学30コマ、音声学15コマ、またはその逆の構成があるかもしれない。音声学と言語学を各Ⅰ、Ⅱと分離する例や、音声学を一般音声学、障害音声学と分類して構成しているところもある。

15コマの担当時間では、言語学は約半分の項目を粗く教えることしかできない。換言すれば、小言語学をざっと通る程度である。音声学は要点だけが押さえられるが、発声や知覚の練習、すなわち言語音生成の実践とその内省、そして耳の訓練が十分にできない。教授者の技量と裁量で言語学の項目を取捨選択し、音声学の時間を要する実習や演習は割愛せざるを得ない。

30コマの担当時間なら、言語学はかろうじて全部の項目が押さえられる。音声学はある程度の言語音生成の確認と聞きわけの内省を伴う練習が可能となる。そして授業の内容をある程度深められる。

したがって、言語学、音声学ともに30コマの授業時間が望ましい。

4. 言語聴覚士養成における言語学・音声学教授の担い手

言語学・音声学教授の主な担い手は非常勤講師である。その担当者の背景を(3)に網羅する。

(3) 言語学・音声学の教授者

- a. 音声学・言語学の専門教育を受けた言語障害を研究対象とする研究者・教員
- b. 音声学・言語学の専門教育を受けた音声や言語を研究する研究者・教員

- c. 音声学・言語学の専門教育を受けている大学院生(博士前期または博士後期)
- d. 音声学・言語学の知識を有する他の分野の研究者・教員か大学院生
- e. 音声学・言語学の知識を有する言語聴覚士

どのタイプの教授者が最適かは不明である。現実には専門学校または大学の運営・経営上の条件から身近な人材に依頼して担当させている。

この背景が異なる教授者が担当することにより、つぎのような三つの問題点が浮かび上がる。まず第一は、教授に要求される言語学の項目が広範囲にわたっているが、言語学者の専門分野は各論に限定されるので、小言語学の範囲でも教員によって言語学の各論に対する教授内容の濃淡が生じる。ましてやそれに日本語学、社会言語学、心理言語学が加わっているため、単独の教授者で内容全体に均質な教授を行うのには至難の技が要る。複数の専門分野が異なる教員で担当することが望ましいかもしれない。第二には、教授者の背景が異なることで、養成機関間の教育内容が不均一、不統一となる。言い換えれば教育内容の重点事項が異なってくる。教授者の出身がどこか、何か、で言語学・音声学の内容が異なっている。同じ言語系出身でも専門教育を受けた時期と出身校、そしてその後の研鑽によって学問の特色が異なる。例えば専門用語とその背景に何を見るか、また重視する体系が何か等である。ましてや言語学系、日本語学系、国語学系、教育学系、外国語学系、独学系?では、重複する部分もあるが、そうでない部分が多い。第三には、教授者の技量と質の違いで、教育機関によって教授内容の質のばらつきが大きく出てくる。その技量と質とは、項目の背景を体系としてどこまで深められるか、項目にあがっていない言語学や音声学の新しい知見(整合性と妥当性が高く現在の定説となっている事柄や理論)をどう加えていくか、言語音の生成と知覚を内省と結びつけて教授・訓練できるか、言語学と音声学を言語障害の分析にどう役立てられるかを具体的に語ることができるか、である。

当然のことだが、教員は教授法の工夫と同様に研究または臨床を通しての自己研修が不可欠である。各教員のその努力によって幾分かここにあげた問題が緩和されているのであろう。

5. セラピーの現場と言語聴覚士育成の現場からの意見

現在、セラピーの臨床とST養成教育の指導的な立場にいる方々からの言語学・音声学に関する要望や意見を集約してみると以下ようになった。(4)にSTに対して言語学・音声学の知識の必要性を説いた意見を、(5)にセラピーの実践から言語学・音声学に望む声を挙げる。

(4) これからのSTに対して

- a. STは言語学的側面の知識（音韻論・形態論・統語論・意味論・語用論）の基本的な意味と相互関係の把握が不可欠である。特に生理学過程としての構音器官を使つての言語音の生成に関して言語学的側面からの評価が求められる。
- b. 音響学的な現象としての「声」を客観的に理解するための知識と技術が必要である。専門領域である「構音障害」にアプローチするには、異常構音（異常な調音）を聞き分ける「耳」をもつことはSTにとって必須となる。

この(4a)と(4b)は、言語学・音声学の担当者も同様の認識であろう。教授者は学生がこれらの能力を習得するように、またその技術の練成に、努めているはずである。その教授を実践する担当教員に必要なものは、言語学・音声学教授のための時間の充足であり、担当教員の課題は、教員自身の技量と質の向上である。

(5) セラピーの実践と言語学・音声学の関わり

- a. STの中には、構音障害以外は構音表記が不要と思っているのか、カタカナ表記で音声を書き記述する者がいる。STは音声を分析するという姿勢を常に持つべきである。言語学・音声学の教授でそれを培ってほしい。
- b. 音声学・言語学はSTにとって重要な科目と言うものの、臨床と学問が乖離している。その橋渡しは？
- c. 言語学の中に位置づけられる「語用論」の評価が、言語学者から提示されることを期待する。
- d. 構音障害の評価には、音声学・言語学者の積極的な参画が望まれる。
- e. 構音発達や言語発達（特に統語）のデータは

古いものが使われている。言語学や音声学の新しいデータや知見は？

- f. 音声学の複数の教科書で、IPAを用いた日本語の表記が統一されていないので、混乱している。
- g. 日本音声言語医学会と日本聴能言語学会で示されている構音検査は、古い絵カードである上に、構音（調音の）表記も誤っている。音声学の専門家による改訂を望む。

人の発話を客観的に観察して、記述するためには、「母語の文法と辞書が、母語話者（自分）の頭の中にある。」ということを前提に、内省を通して自分の発話と知覚の過程を対象化して理解することが不可欠である。IPAのトレーニングもそれを培う一つの過程である。それを習得していれば確信をもって音声に対峙し、(5a)の音声を分析するという姿勢は持てるはずである。しかしその能力をセラピーの現場で活かせるかどうかはまた別個の問題がある。例えば、指導的な立場にあるSTが記述はカタカナでいいということであれば、それまでであろう。

(5b)の指摘の臨床と学問が乖離している現実を少しでも解消していくには、言語学や音声学が医学の生理学や解剖学のように、臨床にもっと接近し密着しなければならない。言語学・音声学は過去に言語障害を対象とした分析から大きな糧を得てきたのに²²⁾、言語学者や音声学で言語障害に関心をもつのは、ほんの少数である。したがってそこからの成果も臨床現場に対して量質ともに乏しくなっている。これは今後の言語学や音声学とその教育に関して大きな課題となるべきことである。

語用論が小言語学を母体としているのなら、その分野は言語学の中でもっとも具体的な実用性を持ち、ことばの社会的機能を分析する部門であると言える。発達やその障害の分析に不可欠な認知の問題も統語論や意味論と同様に関係してくる。しかし個別の言語現象の分析はいろいろなされてきているが、統一的、体系的な説明からの評価を得るにはまだ時間がかかると思われる¹³⁾。ただ会話や発話の行為を特定の理論的枠組みで、例えば古典的なグライス流に、分析してゆくことは可能である。しかし解釈や記述が多義にわたることは

否めないだろう¹²⁾。言語障害に語用論の枠組みを利用した分析も見られるが⁸⁾、(5c)の期待にはまだまだ応えられないと思われる。

(5d)や(5f)で指摘されている構音障害の評価には、音韻論的にも音声学的にも、2. で触れた「素性」を取り入れた評価を実践すれば、音韻符号化から発声発話に結びつくより明示的な記述が可能である。したがって構音発達や言語発達により新しい知見を取り入れていくには、不完全指定理論や最適性理論等の音韻理論とGBからミニマリストプログラムを理解できる素養を身につけることが不可欠となる。

(5f)と(5g)に取り上げられている日本語とIPAの表記の問題であるが、音声学に限らず、教科書や専門書には必ず著者の意図や考えが反映されている。教科書に挙げられている日本語に現われる単音とIPAの記号との照合リストも同様なはずで、その著者の意図を読み解くか、教授者からそれを学べば、複数の異なるリストがあっても、混乱は生じない。しかしそれができないとき、それらが自分の発音と異なっていたらどうだろうか。リストは標準語なのだろうか。標準語は社会言語学という規範意識、すなわち心理的な概念なので³⁾、現実の言語として存在しない。音声学者が架空の言語を想定してIPAのリストを作成するはずがないので、それは著者の発音かもしれない。または統計的な研究結果かもしれない。それはそれとして、日本語のもっとも信頼できる拠り所は、教科書ではなく日本語母語話者である自分の日本語である。例えば子音の単音なら、内省で自分の調音点あるいは調音（構音）の位置を、調音（構音）法を、有声無声を確認してIPAに当てはめるのが最も妥当なその子音の確認方法である。すなわち、教科書にある表記や記述、例えば舌や唇の動き等、と自分の内省が異なれば、自分の内省が自分の日本語であり、テキストの記述は日本語の発音の変異あるいは変異の範囲にあるものと考えられる。あくまでテキストのリストは自分の内省のための叩き台なのである。したがって、リストの不統一に悩まされないためには、内省が的確にできるようになる練習を重ね、音声のカテゴリーの背景を知識として正確に把握しておかねばならない。これは学ぶ者にとっては大きな自己改革であろう。

日本語のIPAの表記で複数の表現があるとき、例えば、あるテキストで日本語の促音を含む「行った」を、[ita:a]と[it'ta]という二通りに表記しているとき、以下のような判断が可能である。ここで破裂音（閉鎖音）[t]を調音音声学的に考えてみると、破裂音は、閉鎖そして開放、または閉鎖、破裂、開放の操作手順で発せられる。すなわち[t]は複数の異なる操作が必要となる。したがって前者の表記では、超分節的特徴の「長い」を表す[:]が[t]のどの操作を長くするのか戸惑ってしまう。後者の[t']なら開放を伴わない閉鎖だけの[t]に開放を伴う[t]が後続しているので、閉鎖が長くなることを表せる。したがって後者が適切となる。Chomsky & Halleの音韻素性で判断すると、閉鎖音は口腔内で調音法素性の[－連続性]（[－continuant]）あるいは[非継続音性]（[non-continuant]）という素性をもつ、すなわち非連続な分節音なので、当然長く伸ばすことができない。したがって[ita:a]は不適切なことがわかる。一方、「喫茶」[kis:a]のような促音は、摩擦音[s]が[+連続性]（[+continuant]）あるいは[継続音性]（[continuant]）なので、この表記は適切となる。このような知識は、構音評価や構音検査に役立つと思われる。

6. 言語学・音声学からの提言

ここまで述べてきた言語聴覚士制度からの要望、セラピーの現場・言語聴覚士養成の現場からの期待、それに新しい言語学・音声学の研究成果投入も勘案し、STまたはSTを目指す人たちが、言語学・音声学の勉強に関して、以下の七つの項目のことを理解し、考慮に入れておかれることを望みたい。

第一に、専門的な用語を正確に把握する。定義、形態、機能そしてその背景（制約や規則）は、発話産出や知覚のメカニズムに結びついている。用語が曖昧な例をあげてみると、臨床の教科書でよく目にする「第1音の繰り返しがある」という表現がある。しかしそれが何を表しているのかよくわからない。「音」とは何かわからないからである²⁵⁾。単音なのか、分節素なのか、音素なのか、モーラなのか、音節なのか、フットなのか。おそらく臨床現場では「音」で通じる仲間の符丁のようなものがあるのであろうが、音とは何かを定義

して使用しているのではないようである。それではその表現から背景が全く見えて来ないだろう。またモーラと拍は同一だと思いがちであるが、それらは異なる概念を表している。前者は普遍性のある音韻単位であるが、後者はリズムの繰り返しの基準を言う。日本語は、モーラを基準とするリズムでモーラ拍リズム、フランス語は音節拍リズムである⁶⁾。またリズムに関わるプロソディの単位では、フットも重要事項である¹⁸⁾。用語を適確に捉えていれば、理解がより深くなり、またそこからの発展性も大きく広がる。その他、これまでに触れたように国家試験の出題項目にはない重要な用語や概念や理論も多い。

第二に、表記は正確にまた適切に用いる。目的によって使用する表記法は異なる。例えば日本語の語句や文の表記は仮名で、日本語の音素または頭の中での分節素、音韻論の基底や入力の表示、そして文法の活用や形態素は訓令式ローマ字で、音声は音声記号（簡略表記：体系重視、精密表記：調音（構音）点重視）で表す。何を用いて表記するかで、見えるもの見えのないものがある。例えば、活用や接辞の連結の変化するものとしのないものが、仮名表記では見えなくなる。仮名表記の「かく」（書く）、「かかれる」、「かかれない」が、訓令式ローマ字だと「kak-u」、「kak-a-re-ru」、「kak-a-re-na-i」となり語幹、活用語尾、接辞の結びつきが明らかになる。

第三に、IPAの記号の背景を理解する。IPAは分節音における調音器官の動態を表している。正確な記述は調音器官がどう動いて発話に至るかを含意している。そして分節音の個性をより具体的に分析的に把握するには、音韻素性を用いての記述もときに併用すべきである。

第四に、頭の中で最終的に線状にならぶ音声のプランニングまでの生成過程、いわゆる符号化のステージにおけるプロセスと、その音声のプランニングを実現する調音（構音）の過程でおこっていることとは、区別して理解する²⁷⁾。失語症、構音障害、音声障害、吃音等のセラピーに直結する重要な情報である。

第五に、言語や音声の普遍性と個別性を把握する。例えば、日本語と英語とでは音韻単位で共通なところも多いが、その機能が異なっている部分がある。例えば、許容できる音節構造やモーラの

機能が異なり、それらに関わる規則や制約の階層も異なる。こればかりではないが、外国語で効果があったセラピーの方法を取り入れ、日本語を対象に読み変えるには不可欠な知識である²⁷⁾。

第六に、統語論の生成文法（GB、ミニマリスト）の基本的な枠組み、音韻論の最適性理論の考え方、語用論の汎用性の高い基礎事項やその発展的な事柄、最近の心理言語学の各種言語モデルや社会言語学の変異や方言ならびにピジンやクリオールの意義は知っておきたい。欧米では20年以上前から生成文法の枠組みで失語症の解明に取り組んでいる²⁾ ²⁸⁾。また句構造、c-command等、の理解は言語獲得や言語発達には不可欠だろう²⁰⁾ ²¹⁾。音韻論では1993年以降、最適性理論が主流の音韻理論となっている¹⁸⁾。心理言語学の発話産出や知覚の言語モデルは脳機能の研究に対応しようとしている²³⁾。日本語学ではその創成期から標準語と方言という対立の捉え方は用いていない。母語話者一人一人の中に文法を探ろうとしている。

そして最後に、繰り返しになるが、母語の音声や音韻・形態システムや文法、意味の目録、談話の方策等のもっとも間違いのない最適なサンプルと基準は話者（ST一人一人）の頭の中の辞書と発話と知覚のプロセスにあることを銘記されたい。内省によってそれらを確認できる能力をもたなければ、確信をもって他人の音声言語を分析できないだろう。その能力を身につける手掛かりや指標がIPAであり、専門用語であり、言語理論である。したがってその手掛かりや指標に沿って自分の言語能力を対象化していくことが言語学・音声学の勉強の基礎と思われる。

蛇足として、あえて言語学・音声学の知見利用の利点を要約すると、以下のようなことになる。第一に発話産出過程や知覚のメカニズムを通して、より客観的に言語障害の要因に迫ることが可能になり、それによってこれまで見過ごされてきた言語障害の側面が明らかになってくる。第二に発話産出過程や知覚のシステムを、整合性と妥当性が高い仮説に基づく分析を通して理解することで、それに基づく総合的な診断や矯正のプランニングに臨床的な効果が期待できる。そして第三に費用がそれほどかからない。

7. STとSTを目指す人たちにとっての言語学と音声学

7.1 教室から

教授者がいかに高邁な理想と情熱で授業に臨んでも、学生の意識と意向に大きな隔たりがあり、それを埋めていくことができないと、両者ともに疲弊する。言い換えれば学習者のニーズとレディネスに合わない授業や講義は、両者のストレスを増幅させるだけである。著者が1997年から今日まで13年間、ST養成教育機関における講義で実施してきたアンケートによる学生の意識調査と音声学・言語学の授業記録に基づく、どの時期のどの教育機関のどのクラスにおいても、STを目指す動機が前向きで、知的好奇心と知識欲が旺盛で、学習意欲も高い学生がいる。その学生たちが教授者の姿勢を理解し、勉学にも好成績をあげながら、凡庸な他の学生たちを補助し、引っ張っていくのが通例であった。

しかし当初から、規範を習いにきているのだという姿勢を崩さず、現在の自分から脱皮できない、あるいはしない学生も少なからずいる。世の中には正誤があるのだから、音声や言語においても規範があり、それをわかりやすく教えるべきだということなのである。本に書かれていることは絶対正しいという信念を曲げない人もいる。同じ単語なのに、これまでの自分の語用とかけ離れている専門用語（メタ言語）を、定義を踏まえて使うのは苦痛で面倒だからいやだという人もいれば、教室でおかしな声を出す音声の実習は絶対にいやという人もいる。国家試験の制度確立以後それらは、効率のよい試験勉強を教えるべきだということに集約されてくる。このような声はFDの一環として実施されている学生のVOICE（声）等に毎年散見する。そして近年はその数が増えている。

従来的高等教育では、勉学を通じて自己の脱皮

ができないような学生は試験で落とせばよかったのである。そしてその再受講で蘇る学生が多かったのだが、昨今事情が異なってきている。それは活発な学校側のFD活動の要請にも見られるように、教授者から学生へのサービスを過剰化しなければならなくなっている。これはある大学の極端な例だが、文学の授業が授業外の読書を前提に構成されていることに、教育担当の責任者が、学生に余分な負担を与える、と文学の教員を叱責した話や、大学院の言語学の科目で、活字ばかりで書かれている本を読まされたという院生からの苦情が取り上げられた話も聞く。

ここかしこでそのような状況のもと、教授法の領域を超えて、STを目指す人たちの意識の底上げにはどのような方法があるのか。例えばSTを目指す学生のニーズに外部からの圧力で、レベルの高い言語学と音声学が組み込まれる方策も考えられる。

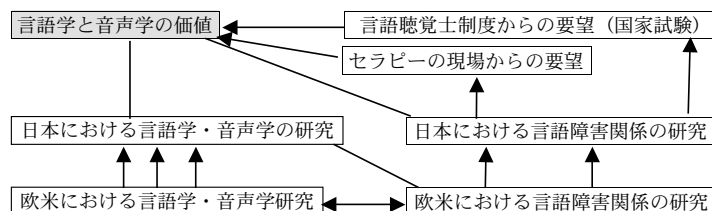
7.2 STにとっての言語学と音声学

STを目指す学生の科目や学問に対するニーズの向上には、実習先の現場で活躍するSTからの示唆や教示がもっとも有効であろう。現場の優秀なSTの言語学と音声学に対する認識あるいはその価値の評価の一例は(5)に示したような期待と懐疑である。一般的なSTのその認識や価値観にはどのような影響力が作用しているのだろうか。それを表した影響力の構図を(6)に示す。現在STにとって言語学・音声学の価値は以下の構図の中の影響力で決定されていると想定する。

(6) 言語学。音声学の価値の評価

（“→”は矢印への影響力大，“↔”双方向に影響力がある，“—”は影響力小、

結びつきがないのは双方の影響力が少ないか双方または一方の無視を表す。）



(6)で、網掛けの言語学と音声学の価値がSTを目指す人たちの一般的な価値観である。またこの構図の言語学・音声学の研究、あるいは言語障害関係の研究は近年の研究を意味する。以下に(6)を解説する。

欧米では言語学・音声学研究成果が言語障害の研究に取り入れられている^{2) 24) 28)}。また日本の言語学・音声学の研究においては欧米の言語学・音声学研究成果の大部分が取り入れられ、その導入は迅速である。例えば、1993年に欧米で私的に発表された有力な音韻論の仮説は、翌年に複数の研究者によって日本の専門誌にその意義が紹介され、1996年には、月刊言語と日本音声学誌に、異なる著者によって、相次いでその概要が紹介されている^{7) 9) 14) 15) 16) 29)}。私的な研究会でもその発表の翌年にはもうその論文の勉強会を行っていた。また同様に欧米の言語障害の研究成果も迅速に日本の言語障害の研究に取り入れられている¹¹⁾。

一方、日本での言語学・音声学の研究と日本の言語障害関係の研究は、ほとんど無視の関係に近い。その理由の一つは、これまでに言語学・音声学の新しい知見や正確なアプローチをあまり気にせず各言語障害の評価法が確立していることである。言い換えれば、言語学や音声学を深く知らなくても通用する言語障害学の各分野が日本にはしっかりと存在し、君臨していることである。そうだった背景の一つは、5. で触れたように日本では言語障害を対象にして研究を持続している言語学・音声学畑出身の現役の研究者がきわめて少ないことである。それに加えて、一部の人たちを除いて¹⁰⁾、言語学・音声学に精通している言語障害畑出身の研究者も少なかったからだと思われる。畑違いの専門分野に分け入ることは、その動機が堅実で関心を維持できないと、そしてその成果の評価が伴わないと、大変むずかしいことである。人は、理解し難いことを間違いとしたり、触れずに避けておくことがごくふつうである。また裏付けがなくてもわかりやすいことや流布していることを真実とも思いこみがちである。言語学・音声学と言語障害学の文献に散見する双方の専門用語の解釈や訳語を見ると、そういう傾向に陥っているところも窺える²⁶⁾。現状では言語障害研究の成果からSTやSTの制度への影響力がか

なり大きいはずだが、そこにレベルの高い言語学や音声学が組み込まれているとは思えない。

STを目指す人たちに言語学・音声学の有用性を伝えるのは、ST養成校の先生方で、言語学・音声学の担当者はもちろん、他の分野の先生方もその一端を担っている。それが日本の言語学・音声学の研究と言語障害関係の研究からSTを目指す人たちの言語学・音声学に至るか細い線である。6. で述べたことはこのか細い線の芯である。そしてそれはセラピーの現場からやSTの制度からの力強い影響力にはとても及ばないだろう。

結論を述べると、まず、日本の言語障害の研究が、欧米の言語学・音声学の分析を取り入れた言語障害の研究も無視せずに、努力して積極的に取り入れる。そして日本における言語障害関係の研究からの影響力をセラピーの現場や国家試験に強く反映させる。そうすると自らSTを目指す人たちがレベルの高い言語学・音声学のニーズをもつはずである。それに加えてその一番大きな影響力をもつ日本の言語障害関係の研究に、日本の言語学・音声学の研究が積極的に関わっていけば、それが底支えとなって、言語学・音声学が言語障害の臨床と関わりもつ足場を築いていけるだろう。

8. 結論と課題

言語学・音声学が言語障害の評価や分析、そしてその背景の想定に役立つものであるとしても、STやSTを目指す人たちが言語学・音声学に価値を置いていなければ、その有効性を生かすことができない。

彼ら/彼女たちにそれを理解してもらう直接的なアプローチは、第一に言語聴覚士制度からの教示、第二に言語学・音声学の教授者による示唆、第三にセラピーの現場からのアドバイス、の三方法がある。その中で第一と第三がきわめて大きな影響力をもつ。したがってまず、第一に関わる国家試験出題項目の問題点は是正を望みたい。特に欠落している発話や知覚の背景につながる新しい言語学・音声学の概念や用語を取り入れることが期待される。そして言語学や音声学の知見を必要とする事柄の決定には複数の言語学者と音声学者の参画を望みたい。

そして微力ながら第二に関して、STやそれを目指す人が言語学・音声学を学ぶにあたって、6.

の「言語学・音声学からの提言」で述べた七つの項目を実践することを望みたい。すなわち専門用語の正確な把握、表記の正確で適切な使用、IPAとその背景の把握、発話産出の生成過程の理解、言語の普遍性と個別性の理解、新しい言語学の知見の習得、自分の発話や知覚の内省の習得、を実践することである。そこで身に付けた能力や技術を駆使することで、言語障害の各症状の評価がより正確にまた明示的になる可能性が期待できる。当然のことながら、言語学や音声学の教授に携わる者（授業や研修会の講師や講演者）は、言語学・音声学の研究成果が言語障害の諸相の分析に有効であることを具体的に示さなければならないだろう。そしてその音声言語の記述や分析に不可欠な事項を、その発展と応用を踏まえて教授していくには、教授者自身の技量と質の向上が不可欠である。それには研究または臨床の研鑽を積んでいかねばならない。

また間接的な期待として、日本の言語障害の研究や研究者が、欧米の言語学・音声学を取り入れた言語障害の研究成果の影響を受け、現在の言語学・音声学の成果を理解することも期待される。ただそれには日本の言語学者、音声学者が言語障害の分析や研究に関心を示して、言語障害の研究に成果をあげていくことが併走していなければならないだろう。

追記：本論は、2008年6月に、北海道医療大学・第317回日本音声学学会研究例会・日本音響学会聴覚研究会合同ミニシンポジウム：「音声研究と言語聴覚士教育・臨床」で、発表した内容を深め、加筆したものである。

[参考文献]

- 1) Chomsky, N., & Halle, M.(1968):The Sound Pattern of English. The MIT Press.
- 2) Caplan, D. (1987):Neurolinguistics and Linguistic Aphasiology: An Introduction. Camdridge University Press.
- 3) ダニエル・ロング, 中井精一, 宮治弘明編 (2001): 応用社会言語学を学ぶ人のために. 世界思想社.
- 4) Dell & O'Seaghdha(1991):Mediated and convergent lexical priming in language production; a comment to Levelt et al.(1991). Psychological review 98,604-614.
- 5) 服部四郎編 (1986): ヤーコブソン選集 1・言語の分析.大修館書店.
- 6) 原口庄介 (1994): 音韻論.開拓社.
- 7) 本間猛 (1996): 音韻理論の展望: 音声学会会報211, 20-26.
- 8) 堀裕加, 石原寛子, 石坂郁代, 納富恵子 (2006): 福岡教育大学障害児治療教育センター年報, 19, 11-20.
- 9) 稲田俊明 (1994): Optimality and Inversion: 英語青年 139, 34.
- 10) 伊藤友彦・辰巳格 (1997): 特殊拍に対するメタ言語知識の発達, 音声言語医学(38), 196-203.
- 11) 伊藤友彦 (1998): 潜在的修正仮説とSyntax Spurt現象.文部科学省科学研究補助重点領域研究.こころの発達: 認知的成長の機構, 平成9年度研究成果報告書, 135-142.
- 12) 加藤重広 (2009): 語用論の来し方とそのゆくえ.月刊言語12月号, 32-37.
- 13) 小泉保編 (2001): 語用論研究. 三省堂.
- 14) 窪蘭晴夫 (1996): 制約理論の台頭 (最適性理論入門上). 月刊言語 4月号, 85-91.
- 15) 窪蘭晴夫 (1996): 生成文法と最適性理論 (最適性理論入門中). 月刊言語 5月号, 85-92.
- 16) 窪蘭晴夫 (1996): OTの発展と課題 (最適性理論入門下). 月刊言語 6月号, 94-101.
- 17) 窪蘭晴夫 (1999): 日本語の音声.岩波書店.
- 18) 窪蘭晴夫, 本間猛 (2002): 音節とモーラ. 研究社.
- 19) 三宅正隆 (1994): Optimality Theory:「規則」から「制約」へ. 英語青年139, 563
- 20) 三原健一, 平岩健 (2006): 新日本語の統語構造. 松柏社.
- 21) 大津由紀雄 (1999): 言語の普遍性と領域固有性. 言語の獲得と喪失, 岩波講座言語の科学, 10, 2-37.
- 22) R.ヤーコブソン 著, 服部四郎編・監訳 (1976): 失語症と言語学. 岩波書店.
- 23) 笹沼澄子編集・辰巳格編集協力 (2005): 言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論. 医学書院.
- 24) 上田 功 (2008): 音韻理論と構音障害.音声

研究, 12(3), 3-16.

- 25) 氏平 明 (1999) : 吃音者と健常者の発話の非流暢性について. 音声研究, 3(1), 65-75.
- 26) 氏平 明 (2006) : 笹沼澄子編集・辰巳格編集協力 言語コミュニケーション障害の新しい視点と介入理論. 音声研究, 10(2), 90-94.
- 27) 氏平 明 (2008) : 言語学的分析からの吃音治療の展望, コミュニケーション障害学, 25(2), 129-136.
- 28) Yosef Grodzinsky (1999) : 言語理論と失語症, 岩波講座言語の科学10, 言語の獲得と喪失.
- 29) 山本英二 (1995) : 派生. 英語青年, 140, 590.

[参考資料]

言語聴覚士国家試験出題基準 平成20年4月版

[意見等の資料提供]

大阪河崎リハビリテーション大学, 大阪医療福祉専門学校